

## 日本とフランスのアンブローズ・

## パレ四百年祭を巡って

大村敏郎

一九九〇年十二月二十日の夜、東京お茶の水の日仏会館ホールで、近代外科の父アンブローズ・パレ没後四百年記念式典が盛大に挙行された。日本医史学会並びに多数の会員の皆様の御支援御協力に心から感謝申し上げたい。年の暮の押し寄せまったこの時期に、四百人を越す人々、医学に従事している人々、医学をめざす人々、医学に世話になっている人々が集まって、今までわが国とのつながりに脚光を当てたことのなかった偉大なフランス人外科医の再評価をすることができた。もう一部の専門家にのみ知られている存在でなくなったのである。

十九年前フランス留学中に近代外科の父として有名なパレの生地を訪ねたことから始まって、外科史上の意義、日

本とのつながりを調べ、そして没後四百年の時に記念顕彰事業を企だててきた私にとって、念願の夢が叶ったのである。

すでに本学会で何度もアンブローズ・パレ (Ambroise Paré, 1510?~1590) について報告してきたし、今回の四百年祭も学会の全面的な協力をいただいて、一昨年六月から実行委員会を発足させた。当学会から蒲原・蔵方・酒井・中西・深瀬の各先生に委員になっていただき、日本外科学会・日仏医学会と連携しながら計画を進めてきた。

行事として、四百回目の命日に行う記念式典と講演会の他、出版物の発行、NHKテレビ放映による広報活動、日本医学会総会における医学史展示への参加、その他フランス・ラヴァル市におけるパレ四百年祭との交流など盛沢山になった。この実行委員会の特色は共通の認識をもち、活動の活性を高めるために四回も勉強会をもったことである。講師はいずれも日本医史学会の先生方になっていただいた。

外科系の各学会にパレを特別な話題として取上げることがは外科のグループが実現させた。また晩年のパレが書いた

『弁明と旅行記』の部分は日仏医学関係の人々の手で分担翻訳されて、六月頃に四百年祭の記録と共に出版される予定である。

東京の式典は、高橋武蔵野日赤院長の司会で、会長の森岡東大教授の挨拶、実行委員長私の経過報告、日本側代表として羽田日本医師会長、フランス側はグボー・ド・ブルジェール氏の挨拶とつづき、十一月にフランスで取材してきたばかりのパレの生涯にまつわるフィルムと日本の文献資料を組合せ座談会にまとめたビデオが会場の大画面に映しだされた。その大部分は十九年前に訪れた私の旅の再現である。

同日これが教育テレビで全国に放映されたことにより、多くの方がパレに理解と関心を寄せて下さり、反響の大きさに驚いている。式典会場ではさらに「パレの生涯」「日本への影響」「フランス医学と私」という三つの講演が続き、私と酒井シヅ先生、作家の加賀乙彦先生がそれぞれ担当した。

一方、フランスは式典を約一ヶ月くりあげて、十一月二十四、五の両日を頂点に生地ラヴァル市で行われた。その

他九月から三ヶ月間ラヴァル城内の博物館は「人体の映像」というテーマのもとにパレにまつわる展示品を並べ、音楽会、演劇、医学講演会、国際歴史コロキウムなどが次々に開催された。町を挙げてのお祭である。ラヴァル市がパレの使った頭部に孔をあける器具（トレパン）の一式を保管していることもあって、四百年祭のシンボル・マークはアンブローズ・パレの顔を使い、頭部を脳の解剖図に置きかえたものを使っていた。日本のポスターではパレの像を中心に、生れたラヴァルと死んだパリの位置がわかるような地図を背景に入れた。

ラヴァルの式典の一週間前に日本側の森岡会長や私の他NHK取材班が当地を訪ね、地元の人々の大歓迎をうけた。さらに私のみ居残って、クライマックスである国際歴史コロキウムに発表することが出来た。十二人の演者はいずれもフランス語を使用した。会場にはライデンから来た石田純郎氏の顔もみえた。

開会式では遠来の客ということで私にも一言発言の機会が与えられ、発表の際も特別な枠が用意されていた。私の演題は「アンブローズ・パレの外科の旅——フランスから

日本へ」というものでスライドを多用して言葉の壁をのり越えるという、昔パレが使った手法を取入れたのである。二十分の講演に対して十回も拍手が湧いたのは異例のことである。

今回のパレの二つの式典に参加して、日仏両国の交流を深めることに成功した。フランスのパレ専門家たちは研究を共にすることに強い関心を示している。一方では外科と医史学の接点が確立した。これによって今後の研究や発表の場が拡がっていくことを祈りたい。

(慶應義塾大学医史学研究室)

## 蘭学のルーツについて

——オランダ外科医界由来の医学——

石田<sup>1)</sup> 純郎、H・ボイケルス<sup>2)</sup>

江戸時代の蘭学とは、周知のごとく、西洋における医学・科学・技術を受容したものである。しかし、それが西洋において、どのような社会的性格を持った科学や医学であったのか？——それを検討した研究は、少ないようである。

演者は、蘭学を伝えた西洋人、すなわち渡来オランダ人医師及び、受容蘭書のオランダ人著訳者について、プロロポグラフィ的検討(集団的伝記研究法)を行なった。プロロポグラフィとは、歴史において何らかの役割を演じた集団に属する人々の生涯を一括して調査し、共通の各項について分析し、彼等に共通の背景の特質が何であるかを判定する歴史研究の手法とされている。